【 吉井 編 】

1. 地名の由来

成り立ちと経緯 — 平安時代に久米谷から北山を超えて宿り着いた民族が、こんこんと湧き出る清水を発見し住み着いたと云われている。その場所が吉井の庄・住吉神社の一角にある。その後、長期に渡り風水で土は崩れ、岩のすき間から数条の清水が湧き出ていた。昭和の時代なり写真の史跡にした。その清水は飲料水や田畑の用水として村を築き上げた。『吉井』という名も、清水→吉い水 (ヨイミズ)→吉い井戸 (ヨイイド) から呼ばれるようになったとも伝えられている。こうして吉井村は住吉神社周辺の北山裾から発展していった。また、東条川沿い (保沢橋付近) の集落民は他の地区から少し遅れて入植したらしい。

地域の特徴 — 中東条村時代 (1955年迄) は村の中心として小･中学校、村役場、郵便局、病院、商店街等があり繁栄したが、今は過疎地域になりつつある。面積=1.44089 km² 世帯数=102世帯 人口=294人

2. 史跡・建物

吉井の庄・住吉神社、薬師堂、金毘羅神社、開墾園、愛宕山、水の館オアシス川北 などがある（地図参照）。

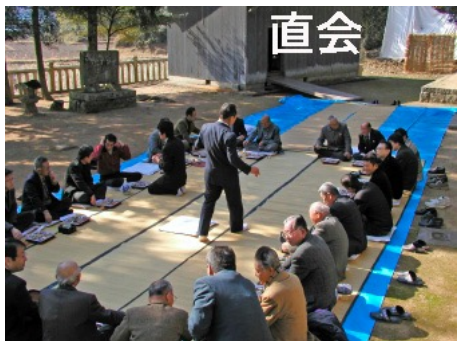
3. 年中行事

吉井の庄・住吉神社で行われているもの（吉井・薮両地区の氏子で祭られる。宮守 (=宮当番) は順番制で氏子の5軒が一年間の祭事を担当する。**秋祭り** — 毎年10月第1の土・日の両日に執りおこなわれ、子供神輿巡行に始まり、神相撲、餅まき、祭事的射を開催する。

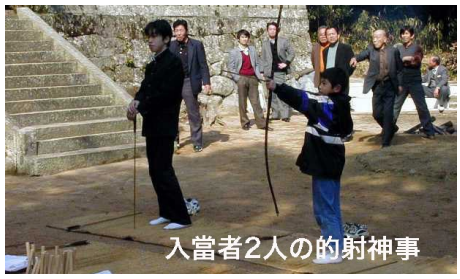
宮入後 境内で吉井小唄音頭を踊る氏子

『子供神輿巡行』— 過去十年間続いた「樽神輿」を引き継ぎ、2001年に子供神輿を新調し、氏子内を『吉井小唄』（後説）を流しながら巡行する行事。吉井と藪の二つ神輿はそれぞれの氏子内を練り歩く祭りをもり立てる。

『宮之當と神事的射』— 神社本殿は中世鎌倉時代 (1257年頃) の創建といわれている。住吉大明神 (神功皇后) を祀り、中世の室町時代 (1410年頃) に執り行われた神事が発祥し後に「宮之當」と名付けられたらしい。毎年2月11日の厳冬の境内で新たな入當者を迎えるに当たって神酒を酌み交わす「直会(なおらい)」を開き、酒八升を飲み交わす。その後に的(まと)射(い)の神事を執りおこない順次に的に向かって矢を放つ。的は直径約1.8 m で約23 m奥に置かれ、独特な作法に則って各自二本の矢を放つことが許された。宮之當・直会(なおらい)に加わることができる當人は、吉井に在住しかつ各家の後継者であることとされた。毎年二人の新入當者は祭事のすべてを取り仕切る習わしであった。



『祭事的射 (New 的射)』— 2007年 (平成19年) 2月11日を最後に、新入當者 (末の當人) がいなくなり休止となった。数年ののち伝統的な「神事的射」の復活を望む声から、有志者が集まり2010年10月2日 「第一回New的射」が開催された。参加者は少なく27名とPR不足の感があった。New射的は宮之當の神事的な要素はなくし、祭りを彩る行事の一



つとなって現在に至っている。四、五百年の伝統をもつ「宮之當の的射」を形態が変わろうとも後世に伝えていく意義は大きいが、神事として近い将来復活できることを切に願っている。

作成した吉井小唄DVD

『神事・神當(こうどう)』— 1500 年 (中世) に発祥した。1960年 (昭和35年) に廃止し「宮之當」に統合された。神當規約によると、宮之當では神社境内で直会(なおらい)を開くのに対して、神當は入當者宅で直会を開きもてなす習い。神當では大歳神社 (大歳の尊) と薬師堂 (薬師如来) をお祀りし、宮之當の神とは異なってはいたが統合された。

『吉井小唄音頭の編纂』— 1988年勇士方々の募金や自費による協力で新しい歌詞が編纂され「新吉井小唄」として誕生した。また踊りの振り付けもなされた。DVD収録にあたり、吉井婦人会の合唱団の方々、和太鼓や三味線などと競演しながら東条コスミックホールや公民館で練習を繰り返し、コスミック別館で本収録を成功させた。(DVDは関係各位へ配布し広く周知されるに至る）。

『火祭とんど』— 昔から2〜10戸ごとに10群以上点在して「とんど焼き」を行ってきた様であるが、その風習もなくなり毎年一月十四日の風物詩が見られなくなっていた。そこで 2008 (平成20) 年に地区を挙げて「どんど焼き」立ち上げた。2016年で 8回目を数え「火祭りトンド」を実施している。一本の青竹に挿して焼く「へそ団子」の数は12個 (但し閏年は13個) を焼き、「買うてんか、買うてんか…」のかけ声でお互いに食べ比べる風習も残っている。またへそ団子の一つは家に持ち帰り、神棚にお供えるのだという。そしてその年最初の雷鳴を聞いた折に家族全員で分け合って食べれば、雷が落ちることはないとも伝えられた。さらに、どんど焼きの残り火 (種火) は元来魔除けになるといわれ家に持ちかえり、門口に立てたり、灯明の元火にするなどした。

『金毘羅神社』— 過去に金比羅講から吉井部落に移管したい意向で部落財産となった。2000 (平成12) 年6月18日の改修工事が完了した。垣田神社神官を迎え25名の参拝者と共に改築祭事を盛大に祝われた。

『薬師堂』— 1980 年頃に老朽化と台風により崩壊。その後1994 年 (平成6) 年に再建し、4月5日に落慶法要が催された。同時に内陣仏堂 (薬師如来座像･弥勒菩薩座像･弘法大師座像) も修復された。薬師堂には「お斎(とき)衆」とよばれる講が存在する (住民の有志が東・中・西 の三講を組織）。各講別に足繁くお参りしお祀りしている。8月21日の数珠繰りには三講全衆と参拝者が一堂に会してお祀り。それ以外にも地区住民の順番制の「お膳当番」がお供えや祭事を執りおこなっている。

『伊勢講』— 江戸時代、慶応 (1865年) の頃から始まったとされる伊勢へお参りする講で約150年の伝統がある。吉井には元来より、元講(もとこう)・旭講(あさひこう)・中講・東講・西講・井上講の六つの伊勢講が存在して各講で独自の行事を執りおこなっていた。が、2005 (平成17)年以降に休講が相次ぎ現在では「元講」の一講のみ存続し、年三回の伊勢講の集まりを持ち伝統を継承し続けている。５年ごとに行われる伊勢神宮参拝は地区挙げた行事で、多くの参拝者を募りよい親睦旅行となっている。

4. 伝説・言い伝え

『龍神岩』— 東条川の黒岩付近 (現在のオアシス川北付近)に鎮座していた巨大岩を祀って、約二百年前から雨乞い神事の行事がなされていたようである。1987 (昭和26) 年川沿いから住吉神社入り口に運び入れ祀られた。

約170×110cm、高さ100cmの巨大岩
重さは数トンか

5. まとめ

最後に、郷土史跡が息づくわがふるさと吉井地区を紹介しましたが、紙面の都合で一部を記載したに過ぎません。さらなる詳細については拙ウェブサイト (www.ry-fujiwara.net)に掲載して公開しています。ご覧下いただけたら幸いです。

文責　藤原良平